

第 607 回：NDL デジタルコレクションを使ってみる（MS）

みなさんこんにちは。火曜日担当の MS です。今回は、以前 LA 通信で紹介した国立国会図書館のデジタルコレクションを使ってみます。

自身の研究の都合上、普段は中世ヨーロッパの作品を読んでいます。なかでも個人的に気に入っている作品のジャンルに、動物のふるまいをもとに宗教的な教訓を語る bestiary (動物寓話集) があります。当時の人々がどういった形で動物の生態を描き、それにどのような意味づけを行ってきたのかという点に関心があります。

もちろん、そういう資料もいいのですが、日本における動物関連の絵画や資料も面白いです。そういう資料を探すのに便利なのが、国立国会図書館のデジタルコレクションです。所蔵されている歴史的資料の多くは登録せずとも閲覧できるので、気軽にデジタル化された写本や刊本を鑑賞できます。

試しに魚を調べてみましょう。ウェブサイトから古典籍資料の項目を選び、その検索欄から「魚」と検索すると、多くの資料がヒットしました。私はマンボウ (*Mola Mola*) が好きなので、探してみます。すると、小野 (1861: 35¹) では黒いマンボウが、『鯨及海豚各種之図 [2]』 (n.d.: 25) では黄色い (!) マンボウが、木村 (n.d.: 103) では写実的なマンボウといった具合に、多様なマンボウが見つけられました。ところで、ヤリマンボウ (*Masturus lanceolatus*) として同定できる絵が簡単に見つけられないのは、単に漁獲されたり、打ち上ったりすることが稀だったから

でしょうか。

他にも、動物の呼称についても色々な発見があるかもしれません。たとえば、シャチ (*Orcinus orca*) の場合、『鯨及海豚各種之図 [1]』では「サカマタ鯨」、『鯨及海豚各種之図 [2]』では「魚虎」と書いて「シャチホコ」のルビが、『鯨及海豚各種之図 [3]』 (n.d., 15) では「サカマタ」、「シャチ」、そして肥前 (五島) での「シャチホコ」および「タカマツ」といった呼称が記録されています。他にも、加正 (n.d.: 6) で「シャチ」、『鯨之図』 (n.d.: 19) で「サカマタ」といった具合に、様々な呼称が確認されます。とはいっても、結局のところ今や「シャチ」か「オルカ」(関西では某施設の影響でしょうか) に落ち着いていますね。「シャチホコ」よりも短い「シャチ」が言語の経済性と、想像上の獣との区別をするという分業によって生き残ったということでしょうか。「サカマタ」といった呼称は背びれの形状をもとにしたものといえるとは思いますし、今回扱った資料においても背びれが強調されて描かれています。データが不足しているので断定的なことは言えませんが、気晴らしに考えてみました。

これ以外にも、国立国会図書館のデジタルコレクションには様々な資料がデジタル化されているので、自分の興味関心に合わせて利用してみてはいかがでしょうか。それでは。

参考文献

Anonymous. n.d.. 『鯨及海豚各種之図

¹ コマ番号をこのように書いておきます。

LA 通信

第 607 回：NDL デジタルコレクションを使ってみる（MS）

[1]』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

Anonymous. n.d. 『鯨及海豚各種之図

[2]』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

Anonymous. n.d. 『鯨及海豚各種之図

[3]』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

Anonymous. n.d. 『鯨之図』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

加正治良太夫. n.d. 『鯨類図巻』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

木村静山. n.d.. 『魚類写生図』. 国立国会図書館デジタルコレクション.

小野蘭山. 1861. 『魚譜』. 国立国会図書館デジタルコレクション.